科学者として

植田宏昭　Ueda Hiroaki
運輸省気象庁気象研究所／地球科学研究科修了

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。
私は現在つくば市にある気象研究所という所で、エル・ニーニョなどの世界の気象・海洋現象の研究をしています。
みなさんの中にも将来科学者になりたいと思う人が沢山いることと思います。そこで、
今後の大学生活に少しでもお役に立てればと思い、一研究者の軌跡と日頃考えていることを簡単にご紹介したいと思います。

一般に研究者になるには、大学または大学院での専門知識の取得が必要です。
とかく大学の前半は基礎的な勉強が多く、その本当の意味を見い出しにくいのですが、
そんな時は今学んでいる知識をどう「道具」として使えるのかと考えてみては如何でしょうか。
目的の理解のために、個々の知識を有機的に繋げていくという視点は大切で、
頭の柔らかい大学時代にその訓練をしておくのは決して無駄なことではないと思います。

大学生としての締めくくりは、就職・進学そして卒論です。
私が卒業しようとしていた時は、ちょうどバブル経済の絶頂期で、
友人がみな一流企業に就職するのをはた目に見ながら、大学院の受験勉強と卒論に追われていました。

少々厳しい話にはなりますが、大学院生活は大学の延長ではありません。
一般に両親から独立すべき年齢に、学生をしているというなんともやるせない感情が大学院生には常にあると思います。
また、これから自分で学びそして生みだして行く研究成果によって、将来の就職先がほぼ決まってしまうので、
そのプレッシャーも小さくはありません。しかし、自分の好きな事に没頭出来るという点では、
人生の中でまたとない機会でもあります。

現在は大学の周辺の研究機関での研究と大学での勉強が両立出来る連携大学院という制度があります。
私は修士論文を共同研究という形で国立防災科学技術研究所でまとめました。
その後再び大学院生を続けながら文部省の学術振興会特別研究員に採用され、研究者の入り口に立つことが出来ました。
この学振という制度は研究費の他に生活費も保証されるので、研究者を目指す人はぜひ挑戦することをお勧めします。
一般に博士論文は、国際的な科学雑誌に掲載された数編の論文があって初めて取得出来るものなので、
大学院生の後半はこの論文書きに没頭することになります。私は少々のめりこみ過ぎて、体を壊してしまいました。
博士課程の大学院を卒業した後は、ポスドク（post doctor）と呼ばれる身分で、
学振特別研究員としてしばらく大学に滞在した後に、気象研究所の選考採用試験を経て現在の職を得ています。

最後にあまり良い表現ではないと思いますが、科学者はArtistであり、演歌歌手のようなものであると思っています。
新たな物を生みだし、それを各地で発表する事は大変面白い反面、自己研鑽も必要とされます。
そういう意味でも、大学では高校のようにただ詰め込むだけの勉強ではなく、自分の栄養のための知識を蓄えることと、
勉強以外の何かに熱中するものを見つける事が大事だと思います。
そのためには、旅に出るのも良いし、サークルやアルバイトを通して様々な世界を垣間見るのも良いでしょう。
社会に出るということは、お金を稼ぐということも当然ながら、社会に自分の力を還元することも重要なことです。
そういう意味でも、科学者として、自分の生み出したものを世の中にフィードバック出来る仕事に就けて
良かったと思っています。
以上説教じみてしまいましたが、これらは全て今の自分への激励の言葉なのかもしれません。
そんな一先輩の一人ごとではありますが、将来設計のお役に立てましたでしょうか。
皆さんの飛躍を祈って筆を置くことにします。